

擬物語詩とは何か

- ①なぜ〈物語〉なのか。擬散文詩とか、擬抒情詩とか、擬女性詩とか、擬自由詩とか。
- ②偽物語詩、戯物語詩、疑物語詩、欺物語詩……はありえないのか。
- ③5上9⇒「詩の構造」とは何か。「構造」を「関係」と置き換えていいのか。
- ④5上11⇒「詩の可能性」とは何か。
- ⑤5上14⇒「物語的な詩」「ロマネスクな詩」「筋のある詩」とは何か
- ⑥5上17⇒抒情詩は説明的・時間的なものを拒否して、一瞬を永遠化するものなのか。
- ⑦5上22⇒自由詩の行分け、行かえの意義とは何か。散文詩の成立条件とは何か。「内在律」とか、「観念のリズム」とは何か。
- ⑧5上26⇒長い詩、短い詩のそれぞれの特徴はどこにあるのか。
- ⑨5下1⇒長い詩がもつ短い詩と異なる手法や構造が必要—非詩的なものの介入とは何か。
- ⑩5下6⇒「詩的な」ムードを持つコントとは何か。
- ⑪5下7⇒シュールレアリスムのデペイズマンや自動筆記の手法とは何か。
- ⑫5下9⇒社会派の詩が、充分の果実を結んでいない、とは何か。
 - 1) 現実の状況の全く散文的な抽出でしかない。
 - 2) 伝統的な抒情詩の方法に足をとられ、感慨の吐露に終始している。
 - 3) 「現実に対する否定を述べ、未来に対するあこがれを語る」という単純な図式の中におちこんで、作品は観念化・類型化の道を辿らざるを得ない
- ⑬5下18⇒人間という、この矛盾に満ちた存在を歌う場合、単なる感情の直接的吐露という手段で、対象を全的にとらえることはむずかしい。これまでの詩にはなかったような、かなり入り組んだ手管と技術とが要求される、と言う——擬物語詩はその解明の手掛とかりを見つける一つの方法たりうるか。
- ⑭6上12⇒村山槐多の散文作品、宮沢賢治の童話の例(5下38～)のように、〈作品が一見ある事件の推移を一貫して叙述しているかに見える〉。ここで「持続性」「一貫性」「展開性」が注目されるのはなぜか。
- ⑮6上13⇒前記の事件が、〈現実の事件ではない〉特質が重要なのはなぜか。(非現実性)
- ⑯6上16⇒これらの作品(村山槐多、宮沢賢治)では、非現実の事件を伝えること、しかも、その事件を叙述することが目的ではない、とはどういうことか。(手段性)
- ⑰6上19⇒(寓話・寓話詩との区別において)詩における叙述は真の叙述ではなく、いわば擬叙述である、とはどういうことか。

その他の問題

- 6上32⇒「詩の不可能性」と「詩は表現ではない」とは何を意味しているのか。
- 6上35⇒「非現実的事件の擬叙述は擬物語詩の「図柄」を構成し、その図柄は現実(総体的現実)を宿す器(あるいは映す鏡)、つまりは「現実関係の総体性に対する理想的な言語的類動物」であらねばならぬ」とはどういうことか。
- 6下14⇒擬物語詩の世界の自由性と、そして同時にその不安定性こそが、あの「語ることを止めざるもの」をおびきよせ、「聖なるもの」を呼びおこす、絶好のわなとは言えないだろうか、とはどういうことか。
- 6下21その他⇒〈物語〉と〈小説〉を同じように扱ってよいのか。〈物語〉は『源氏物語』をはじめ古代から存在するものである。しかし、小説という概念は坪内逍遙の『小説神髓』をはじめ、近代になって初めて成立した概念である。